

京都大学 総合人間学部 広報

特集 フィールドワーク体験記

南極でのフィールドワーク体験	石川 尚人	2
対立か対応か	小田 伸午	4
フィールドワークを変える「言葉」	杉万 俊夫	6
40年あまりのフィールドワークの軌跡から	福井 勝義	8
調査日記抄	松田 清	12

研究・教育活動紹介

新任のご挨拶	稲垣 稜	16
「神は、いい時にいいようにしてくれる」...と思う。	久代 恵介	17
私の経歴と運動医学への招待	林 達也	18
東京から京都へ	藤原 直樹	19

特集

フィールドワーク体験記

南極でのフィールドワーク体験

石川 尚人 (自然科学系)



南極に5人で2ヶ月間暮らして行ったフィールドワークのことを紹介しましょう。

日本は1957年に「昭和基地」を開設して以来、この基地を拠点にして南極域での研究・観測を行ってきています。今秋出発する観測隊で第46次隊になります。私は第42次隊の夏隊に参加し(2000年11月～2001年3月)、夏期間を利用しての地学調査を行いました。調査地は、東南極、エンダービーランド、アムンゼン湾にあるリーセルラルセン山(標高868m)の周りに広がる露岩域です(東経55.6°、南緯66.8°:写真1)。南極大陸は、ロス海とウェッデル海を結ぶくびれた部分から東経側を東南極、西経側を西南極と呼んでいます。このうち東南極は約五億年前より古い岩石からなる大陸です。特に、アムン



写真1 リーセルラルセン山の山並み

ゼン湾の周辺地域に露出している岩石はナピア岩体といい、その岩石の形成年代は約39億年前と推定されています。ナピア岩体は地球上にある最古の大陸塊の一つです。調査に入ったリーセルラルセン山地域には、約19億年前、約12億年前の火成岩類も分布しています。39億年前の石や19億年前の石の原物を現場で見て、触ってみたいありませんか? 実際のところそんな思いで参加を切望していたのがこのときの地学調査でした。

砕氷艦「しらせ」が観測隊の人員/物資を載せて日本からオーストラリアを経由して昭和基地にむかう途中で、我々5名の調査隊は調査地に降ろされ、2ヶ月後「しらせ」が昭和基地からオーストラリアに行く帰路でピックアップされました(2000年12月18日～2001年2月18日:63日間)。調査地は昭和基地から約520km離れています。この2ヶ月間人員・物資の補給無しに5名だけで暮らし、調査するというものでした。これ以前の調査で、この地域が強風地帯であることがわかっていました。第38次隊ではカマボコ型テントが風で倒壊し、第39次隊で建設した建物は一年後第40次隊が行った時には床を残して消え去っていました。そして、第40次隊では調査用に持ち込んだヘリコプターが最大風速58.6m/sの風で損傷し、その後の調査計画を断念しました。この強風への対策として、(1)テントではなくプレハブ式観測小屋を建設する、(2)60m/sの風に耐



写真2 ベースキャンプと湖・大陸氷床

えることができるように、現地で石を積み込み約2トンの重さにした鉄カゴを10基用意し、それに建物を固定する、という方策をとりました。調査期間中、20m/s以上の風が吹いたのが13日間、40m/s以上が6日間、最大瞬間風速は50.7m/sでした。そのときは、建物が浮き上がるような感じがしました（飛ばされなくて良かった）。強風時の風の吹き方は特徴的で、比較的弱い10m/s前後の風が、2-3秒後に30m/s以上の速度をあげ、そして急速に減衰するというパターンでした。主にこのような強風による悪天候のため滞在期間の約1/3は調査ができませんでした。自然現象には太刀打ちできません。

12月18日、約13tの物資をヘリコプターで輸送し、観測隊員/しらせ乗員の支援により観測小屋が建てられ、リーセルラルセン山地域で5人だけでの調査が始まりました。野外調査は基本的に徒歩。山を登っては降りる。大陸氷床を歩いて渡って露頭に取りつくこともありました。木や建物といった対象物がないと距離感がつかめません。すぐそこに見える山に行くのにも1~2時間かかりました。山はガレ場で、登山経験のなかった私には想像以上に大変でした。空のザックも戻るときには岩石試料で20kg以上となることもしばしばあり、かなり堪えました。好きなことをしようと思ったらやっぱり最後は体力ですよ（こんなフィールドワークでなくても）。

観測小屋を建てたベースキャンプ地は抜群の景勝地でした。建物背面にはリーセルラルセン山のある急峻な山並み。これは氷床の流動により削られた地形です。前面にはリチャードソン湖、その向こうに湖に落ち込む大陸氷床が臨めます（写真2）。岩と氷や雪しか見えない殺風景な景色かと思われるかも知れませんが、それぞれに表情があり、圧倒される風景がそこにはありました。草木はないですが、夏期に雪・氷の融水が流れるところには、地衣類、コケ類が旺盛に繁茂しています。時折コウテイペンギンの子供の集団（数十羽）がやってきました（写真3）。子供だけで巣がある海岸域から数キロ離れたところまで集団で歩いてやってくる理由はわかりません。

2月18日、ベースキャンプ地のすべての物資は撤収され、我々はピックアップされました。南極環境の保護のため、持ち込んだすべてのものは回収し、日本まで持ち帰ることが義務付けられています。たちどころに、2ヶ月間過ごした観測小屋は取り壊され、我々が暮らした痕跡はなくなりました。夢のようなフィールドワークは終わりました。

（いしかわ なおと）



写真3 コウテイペンギン

対立か対応か

小田 伸午（認知情報学系）



スポーツ科学者にとってフィールドとは、スポーツ競技の世界である。20年前になるが、日本代表ラグビーチームのトレーニングコーチをしていたときである。世界の強

豪、ウエールズ遠征を控えて、強化合宿に熱が入っていた。当時の日本代表チームの立てた作戦は、「^{がろう}飢狼作戦」。

巨漢相手に、小さくも俊敏な日本選手が、群がるように襲い掛かり、僅差を粘り抜いて物にしようというものであった。トレーニングコーチの筆者に与えられた任務は、飢えた狼の筋力、パワーを1.5割アップさせることであった。筆者自身が自分の体で確かめてその有効性を確認していたウェイトトレーニングを代表チームに初めて導入した。選手達はその逞しさを日に日に増していった。

日本が世界に誇る持ち味は、俊敏性である。バックラインに球を供給して、球を相手の巨漢フォワードから遠くに離して、ぱっと食らいついたと思えば、ぱっと離れる。こうした素早いリズムの波状攻撃を繰り返すうちに、一瞬出来る相手の隙間を突破する能力は、当時の世界のラグビー界にあって、特異的な存在であった。

その日のミーティングはとくに熱が入っていた。私はいまだに、当時のバックリーダーの言葉が忘れられない。話の内容は、いかにコースを立てるか、というテーマであった。ラグビーのバックライン攻撃でコースを立てるといことは、通

常、ゴールラインに向かって直角に（あるいはそれに近い角度で）走ることを意味する。筆者はそう思っていた。タッチラインに平行に走ることを縦に走るというのだと信じて疑わなかった。

「ラグビーのバックのライン攻撃でコースを立てるといことは、ゴールラインに向かって実際に何度の角度で走っているか、ではない。ゴールラインに向かって45度流れて走っていても、相手にとって、自分に向かってコースを立ててくると思わせればいいんだ。そのためには、走る方向、足先の向かう方向は斜めでも、例えば体幹の向きだけでもゴールライン（相手）に向ける。顔と目だけでも相手に向ける。これだけで、相手は自分にひきつけられるんだ。ライン攻撃において、流れないで立てるといことは、ゴールラインに向かって来ると相手に思わせることなんだ」。

若手の選手に熱く語るバックリーダーの感性に触れて、衝撃が走った。走るコースを立てるといことの本質は、感覚論なのであった。相手にとって、斜めに走るコースを立てるように見せる。縦に向かってくると感じさせる。すべて、感覚、感性のことを言っているのであった。それまでの私の理解は、走る選手のコースに分度器をあてて、ゴールラインに向かって何度で走っているか、という客観的理解であった。

大学の研究室で行うスポーツ科学は数値、文字の世界である。それに対して、スポーツのフィールドで行われるスポーツ競技の世界は、感覚、感性の世界である。つまり、前者は客観の世界である。後者は主観の世界であった。

客観の世界と主観の世界は一致するのか、しないのか。それ以来二十年、ラグビーコーチや体育実技を教える体育教師とスポーツ科学の研究者の間を行ったり来たりしながら、このことがいつも抜き差しならない問題として頭をよぎるようになった。客観世界のなかには、主観世界は入り込めず、二つは不一致である。大脳皮質、頭脳で考えると、主観と客観は一致しない。論理的に一致しないからという理由で、スポーツ科学者はスポーツ現場の生命線である感覚の世界を無視して、捨て去っていいのか。

ややもすると対立して仲違いしてしまう二つの世界であるが、互いの世界を混同せずに、互いの世界の関係や対応を見てゆこう。いつしか、このように思うようになった。それは、スポーツを教える教師であり、スポーツ科学を研究する研究者であるという自分自身の二つの側面を認め合うことに他ならなかった。

このようなコンセプトで行う筆者の総合人間学部の専門講義が運動機能論（旧講義名はトレーニング科学）である。アテネ五輪で日本選手の活躍が話題になったが、ハンマー投げというパワー系種目で日本人として初の金メダルという快挙を

成し遂げた室伏広治選手も、ハンマーがどうしたら遠くに飛ぶかという科学的原理と動作を実践するときの自己の内的感覚を見事に総合した選手である。室伏選手は、「最近、ビデオで自分の動きをみて動作研究をするときに、自分の動きを内から観るようになってきた。僕の動きを盗もうとして外から観る人には僕の動きは分からない」と語っている。動作の感覚を研ぎ澄まして、どのような感覚が実際にハンマーを投げたときの記録と対応するのかを、毎日の練習で追い求めてきた結果である。選手も感覚と現実の対応を求めて成功している。選手の動きを数値や論理的言語で記述するスポーツ科学も、その隣に選手の感覚を置いて、両者の対応や関係を探って、世界を広げてゆきたい。

（おだ しんご）



フィールドを変える「言葉」

杉万 俊夫 (人間科学系)



一口にフィールドワークと言っても、いくつかのタイプがある。主たる研究対象が自然現象か、人工物か、人間や社会か。なるべく対象に手を加えず、あるがままを観察する

のか、それとも、ベターメントに向けた変革を意図するのか。私自身は、人間や社会のベターメントを意図するタイプのフィールドワークに携わっている。フィールドの当事者と研究者が協同的実践を展開する場、それが私にとってのフィールドだ。論文や本も、当事者と協同で発信するメッセージに他ならない。

本稿では、「言葉」を軸にフィールドの体験談を紹介してみたい。フィールドの当事者が使用している言葉を理解せずして、協同的実践は成立しない。「サポート校」という学校（正確には私塾）をフィールドにしたときのことである。「イレギュラー対応」という言葉が教員の間で頻繁に使用されていた。サポート校には、当初通学していた高校をさまざまな理由で退学した生徒が通っている。彼らは、通信制高校に在籍し、通信教育によって高校卒業資格を目指しているが、独力で勉学を続けるのは容易ではない。そういう生徒が毎日通い、サポートを受ける場がサポート校である。生徒にとっては、貴重な「居場所」でもある。

たとえば、通信制高校が実施する中間・期末試験に備える特訓授業。全員が出席することなど、まずない。しかし、「出席しないのは、出席しな

い方が----」とはならない。必ず、2度、3度にわたり、出席しなかった生徒のための授業が行われる。また、出席しなかった生徒一人一人に、「どうしたんだ、出ておいでよ」と教員が電話する。このような一連の対応がイレギュラー対応と呼ばれていた。

サポート校では、イレギュラー対応がレギュラーに行われていた。そこには、ついてこない、ついてこれない生徒を切り捨てるのとは、180度違う教育姿勢がある。ねばり強く生徒に働きかけ、生徒が、その気になるのを待つ。その気になったらイレギュラー対応。このように、サポート校という例外的な存在を注視することによって、本流をなす学校教育に何が欠けているかが見えてくる。

言葉は、フィールドを変革する大きな力を秘めている。8年前、ある中山間の過疎地域で、集落ごとの住民自治を育む運動が開始された。その運動は、「ゼロ分のイチ村おこし運動」と命名された。ゼロ分のイチは、無（ゼロ）から最初の有（イチ）を創造する無限の跳躍を指す言葉として、岡田憲夫教授（京大防災研究所）によって考案された。



周囲を山に囲まれた集落

中山間の過疎地域には、保守的かつ閉鎖的な地域体質、また、広大な山林を所有する一握りの有力者による集落運営が色濃く残っている。われわれのフィールドも例外ではなかった。どんないいアイデアも、有力者が首を縦に振らなければ、葬り去られてしまう。第一、集落の意思決定を行う寄り合いには、世帯主（ほとんど男性）しか参加できない。そんな「田舎のいやらしさ」を嫌って、若者はふるさとを捨てる。住み続ける者も、いつしか「長いものには巻かれる」の処世術を身につける。

老若男女、だれでも個人の資格で集落の意思決定や運営に参加できる。やる気のある者で、集落の中長期ビジョンを描き、自らその実現に汗を流す。行政（役場）も、それを支援する。これが、「ゼロ分のイチ村おこし運動」である。

この地域（町）には89の集落がある。現在、その中の16集落が同運動に取り組んでいる。具



ゼロ分のイチ運動でつくったあづま屋に集う

体的な活動内容には、集落の個性がにじみ出る。ギボシ、竹炭などの特産品開発に取り組む集落。体験農業など都会との交流に重点を置く集落。昔から集落に残る祭りを起爆剤にしようとする集落、等々。

同運動を指す「ゼロイチ」という略称は、この町の共通語になった。昨今の町村合併の折にも、この町で展開されている同運動をどのように扱っていくかが、合併協議の主要テーマの一つになった（結局、この町は合併せず、単独の道を選択した）。また、全国からの視察も後を絶たない。

この運動に精力的に取り組んでいる50歳代半ばの人物に、その年老いた母親が言った --- 「おまえ、ゼロブンをがんばってるらしいね」。彼が私に言った、「ゼロブンで、親分を連想しましたよ」。「なるほど、オヤブン（有力者）支配を脱してゼロブン支配だね」と大笑いした。

（本稿で紹介した「ゼロ分のイチ村おこし運動」の詳細については、岩波ブックレット「地域からの挑戦」（岡田・杉万他）を参照されたい。）

（すぎまん としお）

40年あまりのフィールドワークの軌跡から

福井 勝義（文化環境学系）



「どうしてフィールドへ行くのか？」

フィールドワークは、たんなる知的探求を超え、自分の存在を模索する場である、と私は思っている。フィールドワーク

を身体で感じたのは、1回生の終わりの春休みである。先輩たちと一緒に奥美濃の山村調査に出かけたとき、私はかけがえのない充実感を味わった。自分の存在を模索していくようなフィールドワークが、学問の対象となることに気づいたのである。

3回生の秋、私は1年間休学して東アフリカに住むことになる。ナイロビ空港に降りた瞬間、身をよぎる風でサバンナを実感した。ちょうど

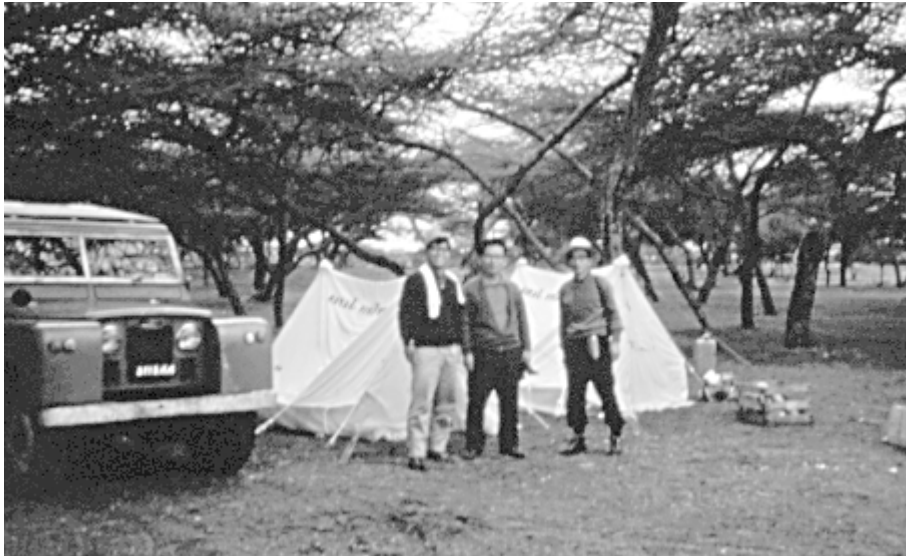
東京オリンピックのさなかだった。私は、今西錦司先生を隊長とする「京都大学アフリカ学術調査隊」の一員として、タンザニアの半農半牧民イラクの村で1年間過ごすことになる。

その村は、海拔3418mのハナン山麓に北斜面の草原にひろがっていた。1700mあたりにテントを張って生活を始めた。当時北海道大学大学院の学生和田正平さんと私の二人暮らしである。最初の頃、私はすがすがしい毎朝をジョギングし、出会った村人に覚えたわずかなスワヒリ語で挨拶をした。

私は当時、社会進化の過程における半農半牧社会の位置づけに大きな関心をいただいていた。しかし、現実のフィールドでは、ただただ畑を耕したり、半地下の屋内で夜更けまで踊ったりして、若者たちと一緒に日常生活を過ごしていた。1年は



オールドバイ峡谷。1959年リーキー夫妻によって猿人化石がこの峡谷で発見された（1964年11月撮影、左から3人目が学生時代の筆者）。



修士課程1回生のときのエチオピア調査。フィールド調査の最終前夜、ヤギを犠牲にして祝う。左から筆者、山下孝介教養部教授（当時）、坂本寧男国立遺伝学研究所研究員（当時）（1968年2月撮影）

またたく間に過ぎていった。せっかく生活に慣れ、基地としての家を建てたころ、「学部をまず卒業して」という新たな伊谷純一郎隊長命令のもと、私は帰国せざるをえなかった。

当時農林生物学科に所属し、昆虫や遺伝などの実習に従事しながら、タンザニアで過ごした村の夢を毎晩のように見ていた。ほぼ1年間にわたる村人たちとの生活は、日本では想像することができない世界だった。

その後、1967年に大学院に進学し、その12月に「京都大学大サハラ学術探検隊」に参加し、おもにエチオピアに滞在した。必然的な研究課題が先にあるのではなく、「偶然の機会」を逃さないことが先決であった。私に対して、「エチオピアにおける栽培植物の多様性」という隊の方針が下ると、それに没頭するのである。偶然による運命みたいな機会を最大限いかして、そこからなにかを吸収していく。

私が積極的に企画をたて実行したのは、博士課程に進んでからはじめた焼畑の調査である。「自然と人間」という大命題をかかげて、四国の

山岳地域に関心を向け、25万分の1そして5万分の1の地図をもとに、命題にふさわしい村落をしぼっていった。最初に訪れた仁淀川の最上流で、「焼畑のむら」に出会ったのである。ここでは、当時すでに日本から消滅してしまったといわれていた焼畑が周囲の山々に点在していた。私は、通算6ヶ月その「焼畑のむら」に住み込むことになる。

「もやの中から」

就職のことなど念頭になかった。ただ「焼畑のむら」に没頭していた。ところが、博士課程の2回生の5月頃、大学院を中退して東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に助手として来ないか、という電話を突如いただいた。その研究所は、通称AA研といって、助手であろうと好きな研究課題に自由に取り組むことができた。同じ好きなことをするなら、経済的保証のある方がよいに決まっている。私は、AA研で新たな課題を模索していった。

それは、「動物に依存することによって、どのように人間社会は規制を受けるのか」といった



博士課程1回生のときの焼畑調査。炎が外に広がらないよう三日月型に火入れをする村人（1970年春撮影、高知県池川町）

素朴なものであった。「植物に依存する社会」は、先の焼畑調査からかなり浮き彫りにすることができた。つぎは、「動物に依存する社会」を求めたのである。

その地域は、エチオピアだった。学生のころ偶然に出会ったエチオピアが忘れられなかった。植民地の影響がほとんどなく、文化においても豊かな多様性がエチオピアには温存されていた。やがて、「簡単に人を殺す」、「中央政府の影響をほとんど受けていない」というドイツの民族学者の短い報告書にとりつかれてしまった。そこは、エチオピア西南部におけるオモ川流域沿いの草原に住む牧畜民ボディ社会だった。

言語に関しても、地域に関してもほとんど情報がない。イタリア占領時代に作成された地図には、ボディ周辺の地域は“Plain of Death”と記されているだけである。私は、その地を求めて、灼熱の中を何日も歩き続けることになる。広い草原の中

で、どこに、どのような人びとが住んでいるのか、まったく見当もつかない。簡単な挨拶ことばですら理解できず、相手の投げかけてきたことばをオウム返しのように繰り返した。

ことばは、幼児が習得していくように、ひとつひとつ学んでいった。彼らの言語がわからないと、現地で生活することは不可能である。そうになると、ことばの習得は早い。半年ほどで、かなりの日常語を話すことができるようになる。

だれがだれなのか。最初のころ教えてもらった名前は、ほとんど偽名であった。その名前をあげても誰も知らず、笑われたこともある。

ことばができなくても、やることはたくさんある。周辺を歩き、しだいにその地に慣れていくこと、植物を採集したり、物質文化をスケッチしたりする。キャンプ地に人びとが訪れると、お互いに呼び合う。やがてその人たちの名前を自然と覚えるようになり、それぞれの間柄もわかってくる。もやにつつまれた世界がときとともに、うっすらと浮かんでくるようになる。

その後、私は30年にわたってこのボディ社会や周辺社会に通うことになる。最近では、毎年のように若い大学院生と、ラバで、あるいは足で歩いて、ひとつひとつの課題にアプローチしていく。ボディ社会そのものからその近隣社会との関わりを求めていくにつれ、ひとつの社会から理解できなかった世界が新たにひろがってくる。自分の存在を裏づけていきたいと同じように、ある課題や作業仮説をいただきながら、その裏づけを丹念に取りつづけていく。それは、自分の存在を裏づけていくことにもつながっていく。

「そこには、日常がある」

現在、地球上の言語は6000あまりといわれているが、その数は近年急速に減少している。21世紀は、「不確定な時代」と位置づけられているが、

将来をまちがいに予測できるのは、多様な言語と思考の消失である。数百年、数千年の歴史の過程で育まれてきた人類の知的遺産の喪失は、私たち人類の思考の可能性を限りなく奪っていく。

地球上からみると点にもならない小さな社会から、私たち人類学は豊かな観念世界や持続的な生存戦略とともに、人間社会の潜在的特性を浮き彫りにしてきた。それらは、どんな社会であろうと、日々の日常生活に存在している。フィールドワークの基本は、なによりも自分の身近な日常への問いかけから始まる。

(ふくい かつよし)



動物図鑑に関心を示すボディの子どもたち。このときしばしば耳にした「ダー・アタン(これは何)?」をもとに現地語を習得していった(1974年1月撮影)。



1歳の雄牛と「闘う」ボディの5～6歳の少年。ボディ社会では、幼いときからウシとの深い絆が育まれていく。「子どもはどのようにして大人になるのか?」(1999年12月撮影)。

調査日記抄

松田 清 (文化環境学系)



総合人間学部専門科目として「日本洋学史」(旧カリキュラム)と「日欧知識交流史」(新カリキュラム)を担当している。学生諸君はあまり

関心をもたないのだろう。登録者数は極めて少ない。この分野の修士論文、博士論文は指導してきたが、残念ながら卒論をとという学部生はまだ現れない。

さて、3年前から科学研究費特定領域研究「江戸のモノづくり」の一環として「蘭学基礎資料の調査・研究」に取り組んでいる。そのためか、本誌編集委員から、フィールド研究の現場報告を書くように要請された。夏休みや講義のない週末を利用して、我ながらいぶん強行な日程で、資料調査を続けている。以下、今夏の調査の一部を日記風に抄録して、責めをふせぎたい。

7月1日(木) 前夜22時12分京都駅発「のぞみ」で福山に向かう。午前零時ゼロ1分同駅発の夜行列車「あかつき」に乗車、肥前山口駅に7時5分着。8時すぎに武雄に到着。幕末佐賀藩蘭学導入の先駆けとなった武雄領主鍋島茂義(1800-1862)が収集した蘭書や関係の古文書を初めて調査したのは、12年前の1992年夏だった。御船山の美しい姿はわからない。資料館開館前の時間を利用して、武雄神社を訪問。境内に茂義が天保8年に勧進した鹽竈神社があった。茂義のなかに林子平の海防思想が生きていたことを実感。10時

すぎに武雄をあとにして平戸に向かう。

7月2日(金)～4日(日) 平戸松浦史料博物館にて科研費「江戸のモノづくり」による合同調査。これまで十数年通いながら調査の機会を得なかった『甲子夜話』原本267冊の全丁をくる。活字本では伝わらない江戸文化の匂いにひたる。



武雄市図書館・歴史資料館と御船山

7月14日(水) 国際シンポジウム「文明交流史からみた宗教と科学」(7月11日、於人間・環境学研究科)の疲れか、ひどい腰痛に苦しみながら、早朝新幹線に乗る。東京都内にて某旧大名家に伝わる門外不出の貴重蘭学資料を写真によって拝見。

7月23日(金) 一週間前と同じ夜行列車を利用して、平戸到着。松浦史料博物館にて『平戸藩楽歳堂蔵書目録』『新增書目』を調査。松浦静山の収集した和漢洋にわたる図書目録である。そのうち洋書だけはこの10年間でほぼ書誌調査を終えたが、のこる和漢書はもう手に負えない。せ

めて目録から全貌を俯瞰したいものだ。

7月24日(土) 早朝、平戸嵐山家の墓地を調査。桂川家は幕府医官としてまた江戸の蘭学サロンの主催者として名高いが、桂川家初代の師家にあたる平戸嵐山家については資料の散逸もあり、大正初年以来研究が進んでいない。

7月25日(日) 初代嵐山甫庵が出島のオランダ人外科医からもらった免許状(1665年1月21日付)を調査。文化財の保存と活用に悩みつつ、平戸をあとにする。マリナーにて瀬戸大橋を渡り、夜9時30分高松着。

7月26日(月)～28日(水) 香川大学附属図書館神原文庫にて、今秋開催の神原甚造没後50年記念展(10月23日～31日)準備のため、展示資料を調査。



平戸嵐山家墓域

8月21日(土) 伊丹空港7時45分発、9時ちょうど庄内空港着。リムジンバスは松林をぬけて、米どころ庄内平野を鶴岡へ。駅前には閑散。鶴岡市立図書館に直行、10時半すぎから幕末庄内藩の下級武士で嘉永4年に海防取調掛となった高橋種之の写本『鎖国論附尾』および著作類(自筆稿本)を調査。『鎖国論附尾』は蛮社の獄(天保9年)の発端となったモリソン号事件を報じたオ

ランダの雑誌記事を翻訳したもので、訳者の覚世道人なる人物の正体は未だに分からない。

蛮社の獄の際に自殺した小関三英は庄内出身の蘭学者である。戦前の庄内を代表する郷土史家阿部正己(1879-1946)の小関三英伝稿本、および史料草稿を拝見。もう一人の郷土史家斎藤治兵衛(1864-1941)の史料集「玄々堂叢書」で、シーボルトの門人山口行齋の事蹟を読む。これら郷土史家の営々たる蓄積をまのあたりにすると、短時間で駆け抜ける自分が恥ずかしくなる。

8月22日(日) 早朝、藩校致道館を見学。これほど昔日の姿をとどめる藩校は初めてだ。鶴ヶ丘七日町の本住寺を訪れ山口行齋の墓(「三隅館春翁行齋居士」とあり)に参る。傍らに「庄内西洋医之魁 山口行齋先生 昭和六年十月 百年記念修築」の標柱がなかば倒れかけている。庄内空港から札幌に向かう。



庄内藩校致道館

8月23日(月) 朝9時、北海道大学正門から初代総長佐藤昌介(植民論あり)の銅像をへてクラーク像に至る。その正面に位置する「聖蹟」碑(閑院宮^{ことひと}載仁親王殿下篆額)の傷んだ碑文を判読する。昭和11年秋、「本学農学部ヲ大本营及行在所」として「農医工理各学部」の「學術研究業績ヲ^{みそなわ}衡セラル是レ洵ニ本学空前ノ盛事ナリトス」云々。北海道大学の苦闘の歴史を感

ずる。9:30より夕方4:00過ぎまで、附属図書館で札幌農学校旧蔵洋書を調査。蔵書構成から優に一大学を為すことを知る。なかでも、幕末の箱館に置かれた洋学研究機関「諸術調所」「箱館洋学所」旧蔵の蘭書15点28冊は、一昨年の函館調査以来、その所在をさがし求めてきた資料だけに、一冊一冊書誌をとりながら、感慨一入である。1900年のパリ万博に出品するために刊行された仏文冊子『札幌農学校誌』*L'Institut agronomique de Sapporo, Japon.* 1900. 61, ii pp. は印刷史の面からも貴重な資料。新千歳空港を6:50発。東京の宿に9:30着。



札幌農学校旧蔵蘭書

8月24日(火) 午前中、江戸東京博物館で「江戸のモノづくり」関係者の合同調査に参加。帰りに同館で開催中の「江戸幕府とロシア」展をみる。展示資料は貴重なものばかり。しかし、「目録のない展示は展示ではない」と常々自分に言い聞かせてきたので、江戸東京博物館の展示姿勢に少々落胆。午後、東京国立博物館にて資料調査。

8月31日(火) 編集集中の「佐賀藩旧蔵蘭書目録」を完成させるため、佐賀県立図書館にて書誌調査。

9月1日(水)より3日(金)まで、9月18日(土)より20日(月)まで 武雄市図書館・歴史資料館で特別展「蘭学の来た道 - 武雄領主の買いもの帳 - 」準備の研究会に参加。

9月22日(水) 日帰りにて東京大学附属図書館鶯軒文庫を調査。鶯軒土肥慶蔵(医学部皮膚科教授、1866-1931)の本草医学関係旧蔵書に伝えられた「加藤見立遺書」が1780年代の長崎蘭学および尾張初期蘭学の貴重資料であることを発見。

9月25日(土) 佐賀県立図書館にて蘭書調査を続行。

9月26日(日) 佐賀県立佐賀城本丸歴史館にて「江戸のモノづくり」地域連携サミットに参加。最初に、文部科学省科学技術・学術政策局長から日本の科学技術教育をめぐる厳しい現状について講話をいただき、ついで幕末の反射炉築造に象徴される西洋科学技術導入の現代的意義について、佐賀、萩、薩摩の研究グループから報告をうけた。最後に科学技術・学術政策局長、佐賀市長、萩市長、佐賀大学学長、本丸歴史館館長、鹿児島島の島津興業社長、佐賀の鍋島報効会理事長らが、開館間もない本丸歴史館の「御座間」で、地域文化財の活用と地域の発展に関する宣言を発表。参加者全員が鍋島緞通の四周に列座、緞通の中央に佐賀藩精煉方製作の蒸気車雛形をおき、床の間には副島種臣書を掲げるという贅沢な演出である。

9月27日(月) 佐賀大学附属図書館小城文庫で蘭学資料調査。長崎大学で予定されていた新構想学部シンポジウムが台風のため中止となる。公務出張による長崎行きをとりやめ、鹿児島市の川内市へ向かう。



副島種臣書（鍋島報効会所蔵）

9月28日（火） 川内市歴史資料館にて、長崎海軍伝習関係資料を調査。佐賀へ戻る。

9月29日（水） 再び佐賀大学附属図書館小城文庫にもどり調査。台風で列車が運休していたが、バスにて武雄へ。武雄市図書館・歴史資料館にて幕末に伝わったウィリアム・シン普森 William Simpson(1823-1899)のクリミア戦争石版画シリーズを調査。

9月30日（木） 帰学。

以上の調査の成果は、今秋開催の一連の展示「蘭学の来た道」（武雄市図書館・歴史資料館）、「『神原文庫』名品展」（香川大学附属図書館）、「土肥慶蔵の医学関係資料とその時代」展（東京大学附属図書館）に部分的に生かすことができた

が、全体をまとめるには時間を要する。来夏の旅を楽しみに、ひとまず調査三昧の夏を終えた次第である。

追記

写真に掲げた副島種臣（1828-1905）の三行書「宇内万邦」は、佐賀藩主鍋島閑叟（斉正、直正、1815-1871）が安政6年元旦（1859年2月3日）に試筆した漢詩を明治12、3年頃に副島が一部語句を改めたもの。「宇内万邦王赤子 図南満地国山河 鎮西快士臣斉正 先唱昇平第一歌 故大納言公安政己未元日 副島種臣」とある。閑叟の試筆では第2句が「斗南尺地国山河」となっていた。安政条約によって自由貿易主義の荒波に投げ出された物情騒然たる日本にあって、欧米列強に伍して南方進出を図らんとする気宇壮大な詩である。

「斗南尺地」は閑叟が夢見ていたオーストラリア進出を表現している。これを「図南満地」と書き換えた副島の心は、「新日本の図南の夢」（明治21年夏成る）を著した菅沼貞風、南進論の先駆とされる稲垣満次郎（明治24年『東方策』を刊行）にも通じるものであろう。

『鍋島直正公伝』第四編（大正9年刊）563頁、「公新年試筆の詩」参照。

（まつだ きよし）

研究・教育活動紹介

新任のご挨拶



2004年4月より、人間・環境学研究科地域空間論講座の助手に着任いたしました稲垣稜と申します。2004年3月に名古屋大学大学院博士後期課程を修了いたしました。

私は普段、自分の名前に「稜(りょう)」という漢字を使用しておりますが、実はこれは戸籍上の漢字ではありません。戸籍では、「綾」という漢字になっております。大半の方は、「あや」と読みますが、「綾」と書いて「りょう」と読むのです。両親は、「稜」の漢字を使用しなかったらしいのですが、私が生まれた当時まだ「稜」の漢字が人名用漢字には無かったために、「綾(りょう)」と名付けたらしいのです。おかげで子どもの頃から女性と間違われることがしばしばありました。そこで、10年ほど前から、通称として「稜」と名乗っております。

さて、私の専攻は都市地理学です。都市地理学とは、都市で行われている社会、経済、文化、政治などに関わる人間活動を空間的視点から研究する学問です。特に、私がこれまで関心を持ってきたテーマは、1990年代以降の大都市圏構造の変化や大都市圏における若年者の移動・就業行動です。

日本では、20世紀半ばの高度経済成長期に、大都市への大量の人口移動が発生しました。その結果、大都市では居住スペースが不足し、多くの人々が郊外で居住するようになりました。その際、郊外で居住する人々の多く(男性)は大都市での就業を継続したため、「大都市 = 就業地、郊外 =

稲垣 稜(文化環境学系)

居住地」という図式が形成されました。この大都市と郊外からなる結節地域を「大都市圏」と呼んでおります。しかし、近年、郊外において就業機能、消費機能の量的、質的な変化が進んだ結果、大都市圏構造に変化が生じつつあります。こうした大都市圏構造の変化を、郊外に居住する若年者の居住地移動や就業行動の観点から研究してきました。

郊外を形成する牽引役となったのは、高度経済成長期に進学や就職のために大都市へ流入してきた人々です。そして、その子ども世代が進学や就職の時期を迎えたのが主に1990年代以降でした。このように、1990年代以降の大都市圏構造を考える場合には、郊外で生まれ育った若年者(郊外第2世代)に着目することが重要です。現代の若年者に着目した研究は、地理学以外の分野でも数多くなされていますが、私の関心は、若年者の行動を大都市圏構造の枠組みで考えることにありました。

以上は、主に博士後期課程在学中のテーマでしたが、最近注目しているのは、アルバイト求人媒体の動向です。若年者の非正規労働力化が進む中、求人側と求職側の橋渡し役となる求人媒体の役割は一層大きくなっているものと思われます。このテーマを、都市地理学の文脈の中で追求していくことが現在の研究課題です。

まだまだ不慣れな点、至らぬ点が多々あり、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、何卒よろしくお願いいたします。

(いながき りょう)

「神は、いい時にいいようにしてくれる」...と思う。

久代 恵介（認知情報学系）



昨年5月1日より人間・環境学研究科において助手職をしており、久代（くしろ）恵介と申します。まずは自己紹介させていただきます。出身は新潟、年齢32歳、妻子の4人暮らしで

あります。経歴は非常に複雑で、自分でも間違えることがあります。筑波大（学部） 上越教育大（修士） 東京医大（博士） ニューヨーク市立マウントサイナイ医大（研究員） ニューヨーク大（ポスドク） 浪人1年 東大（ポスドク）を経て、人間・環境学研究科助手を仰せ付けられました。これだけいろいろ経験（無駄？）をした人はそうはいないだろうと自負（？）しております。

帰国後1年間の浪人生活は以外にも有意義な日々でした。プログラミングを独学し、フリーウェアを多数作成しました。また、近所のご老人にパソコンを教えたり、パソコンの不具合を修理したりという活動をしておりました。結果的には、あの時培ったソフトやハードの知識が、翌年、東大で従事した仕事に役立ちました。東大の多賀巖太郎助教授（発達脳科学）のもと、赤ちゃん相手に日々実験をしていたところ、京大の公募情報を見つけました。応募したところ運良く通り、採用となりました。東大の研究室には後ろ髪引かれる思いでしたが、こんな私が京大で助手をやらせていただけるのは、神様のお力か、単なる偶然か。

申し遅れましたが、私の専門は神経生理学であります。動物の脳に電極を刺し、刺激に応答する神経細胞の電位変化を見るというオーソドックスな手法を用いておりました。東大では赤ちゃんを相手に心理物理的な手法を使っておりました。本学では、前頭連合野の機能を研究されている、船

橋新太郎教授の下でお世話になっております。これまで私は、脳幹を中心とした、前庭反射回路の研究を長らく行ってきたものですから、やるこゝろがまるで違います。しかしながら、前頭連合野には空間情報を持つ神経細胞が存在すること、また前庭からの入力（空間情報）を反映していることを考えあわせると、前頭連合野と前庭をつなぐキーワードは“Space（空間）”であると考えられます。前庭からの空間情報が脳皮質連合野において他の入力と統合処理され、海馬あたりでCognitive Map（認知地図）を形成しているであろう中枢の仕組みには大変興味を持っております。

脱線しますが、新潟出身の私は大のスキーファンであります。スキー滑降には高度な空間の知覚とその瞬時のアップデートが必須であります。運動制御系と連携して、雪面に美しいシュプールを描くといった一連の動作を中枢神経系まで掘り下げて考えることは、途方もない難問です。それでも知りたい。そういう気持ち（奥底）にあり、研究へのモチベーションとなっています。研究における長期的目標は「平衡と空間識の中枢神経機構の解明」と掲げております。目下はその目標の解明に向け、外堀を埋めるべき時期と捉え、いつか本丸に攻め込む糸口を見つけたいと準備しております。

好きなことのために、研究室を転々とし、浪人したり、赤ちゃんを研究したり、ちょっと変わった経歴ですが、運良く、本学の職に赴くことができました。私の場合、“神は、いい時にいいようにしてくれる”ようです。そう信じて、研究を楽しもうと思っております。次に、いい時が訪れるまでは...

（くしろ けいすけ）

私の経歴と運動医学への招待

林 達也（認知情報学系）



本年より人間・環境学
研究科認知・行動科学講
座の助教授に着任した林
達也と申します。私は昭
和61年本学医学部の出
身で、京大病院内科、市
立舞鶴市民病院内科にて
臨床研修の後、平成2年

に第2内科（井村裕夫教授）の糖尿病研究室に大学院生として入りました。研究課題はインスリンの細胞内シグナル伝達で、当時注目されていたPI3キナーゼのインスリンによる活性化機構を検討していました。その過程で運動がどのようなメカニズムで糖尿病を改善するのかに興味が移るようになり、しだいに運動の糖代謝促進効果について勉強するようになりました。幸いにも京都大学には、伏木亨先生（現農学研究科教授）森谷敏夫先生（現人間・環境学研究科教授）がおられて運動生化学と運動生理学の基礎を勉強することができました。学位取得後の平成8年から米国ハーバード医科大学のジョスリン糖尿病センターに3年間留学し、運動による骨格筋AMPキナーゼやMAPキナーゼ活性化の生理的意義に関する研究を行うとともに、運動療法の実地診療についての研修を行いました。平成11年の帰国後は助手として京大病院内分泌・代謝内科（旧第2内科）に勤務していましたが、研究面では中尾一和教授の理解を得て運動に関する研究を継続することができました。とくに森谷教授との共同研究では、電気刺激によって下肢筋を他動的に収縮させると、あたかも実際に運動したように、あるいはそれ以上に糖代謝を活性化できることを世界に先駆けて実証することができました。また、体育実技講師の鴫田佳津子先生、塩崎（梅田）陽子先生という優れた運動指導者にめぐり合い、高齢者や有疾患

患者がイスにすわったままで行える健康増進運動プログラム「すわるピクス」「鍛えマッスル」を開発することができました。その後平成15年になって「運動医学を専攻して研究してよい」というポストの募集があることを知り、さっそく応募したところ、幸いにも審査に通って着任することができました。

さて、日ごろから運動習慣を持っていると、高齢になっても心肺機能や筋力、骨や関節の強さ、柔軟性、平衡感覚などの基本的運動機能を高く保つことが可能です。これはスポーツを行うという観点ではなく、日常生活を独力でスムーズに行うために必要な基本能力です。また、糖尿病、肥満症、高血圧症、高脂血症、骨粗鬆症といった慢性疾患の予防や改善、さらには心筋梗塞や脳血管障害、大腸がんや乳癌などの悪性腫瘍の発病率低下も期待できます。寝つきよく深く眠れる、不安や鬱の傾向が軽減する、体力的・精神的な自信が持てる、などの心理的效果もぜひ利用すべき運動の効果です。

私の研究テーマを一言でまとめると「運動が健康増進作用を発揮するメカニズムの解明」ということになるかと思います。また、運動の効果を効率的に享受できる運動プログラムや、生涯を通して運動不足や過食に陥らないための自己管理法の開発も重要な課題と考えています。現在はまだ研究体制の整備を行っている段階ですが、このような「運動医学（exercise medicine）」に興味を持ち、私と一緒に研究を進めてくれる学生諸君を広く募集しています。

（はやし たつや）

東京から京都へ

藤原 直樹（自然科学系）



昨年の4月東京大学物性研究所から人間・環境学研究科に赴任しました。物性研は、物性（物質の物理的性質）を研究する全国の研究者が、施設を利用するために来る共同利用研である一方、

日本の物性研究において中心的役割をはたす研究機関の一つと見なされています。ここでは全国から研究者が集まって来ると同時に、学生から助手、助手から助教授に昇進できないという内規によって研究者の流動性と活力を維持しています。特に、助手には任期があり、在職中は第一線の研究活動に携わる（部門によっては共同利用の世話で大変な所もある）一方、転出後は中央で得た先端技術を地方に伝えるという役割も担っています。私の場合もその例に該当するかもしれません。

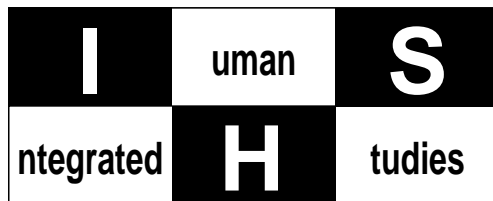
具体的な研究は、高圧で超伝導（電気抵抗が零になる現象）や金属絶縁体転移等の物性を、核磁気共鳴（NMR）を用いて調べています。NMRは、応用例として医療の分野ではMRIがあり、理系では広く知られている測定技術です。NMRを用いた物性研究者は日本に沢山います。日本は世界的に見ても、「NMR王国」と言ってもよい程盛んです。私の場合key wordは高圧下NMR測定であり、現在3万5千気圧までの測定に成功しています。3万気圧以上の高圧で室温から低温（約 - 272 ）に至るNMR測定に成功しているのは、我々物性研グループとフランスパリ南大学のグループだけです。

私が高圧下のNMRを始めたのは、物性研NMR研究室（安岡弘志教授）の助手として在職しているときに、隣の高圧研究室の毛利信男教授から直接誘われたことがきっかけです。高温超伝

導体とよく似た構造を持つ梯子格子銅酸化物に3万気圧以上の高圧をかけると超伝導になることが、1996年毛利研究室の高圧下抵抗測定装置によって見出され大きな話題になっていました。しかし、抵抗測定では物質全体としての性質しかわからないので、NMRによりミクロな情報を引き出す必要があったのです。当時（今でも）3万気圧以上の高圧でNMR測定が成功する保証は全くなく、all or nothing 的な試みでした。高圧研究室の全面的バックアップを得ることができたものの、実際に成功したのは4年後で、その間に両教授の退官、研究所の六本木から柏への移転があり、高圧研究室を引き継がれた上床美也助教授の代にまで及びました。しかし、その間一度も止めようと思わなかったのは、やはり研究の動機と目標が明確だったからだと思います。もちろん、この期間に得た経験や知識、多くの知己は、今の自分の研究の基盤をなすものであり、今となっては大きな財産です。

今後本研究科で何を行うかが問題ですが、今までの経験を生かして高圧を中心とした、極低温、高磁場の多重極限環境下での物性測定研究室を構築したいと思っています。（8月末に物性研究所で使っていたNMR装置の移設が完了しました。）東京にいた期間が長いせいか、「京大はかくあらねば」とか、「京大生はかくあらねば」というような思い入れは私にはあまりありません。しかし、世界である程度通用するぐらいのuniqueな物性測定研究室を、少し時間がかかっても作りたいたいと思っています。uniqueというのは非常に崇高な言葉であって、なりそこねてstrangeにならないよう心がけたいものです。

（ふじわら なおき）



編集後記

本号では、「フィールドワーク体験記」というテーマで、特集を組みました。5名の先生方に、研究報告をかねて、フィールドワークにおける貴重な体験や思い出などを語っていただきました。力作揃いですので、多くの方々に

是非ご一読いただきたいと思います。学生諸子も、今後の研究のために参考にしてください。

「研究・教育活動紹介」欄では、今回は新任の先生方に、自己紹介かたがた熱い文章を寄せていただきました。

「評価」中心の競争が激化しつつある昨今、このような無償の貢献に多大な時間と労力を割いてくださった寄稿者諸氏に、厚くお礼申し上げます。

現在、広報活動の一環として、総合人間学部で「総合人間学部広報」が、大学院人間・環境学研究科で「人環フォーラム」が発行されています。主たる対象は、前者は本学部生、後者は本大学院生というように分化されていますが、改組によって両部局の教員がすべて人間・環境学研究科所属となったという現状、また、広報メディアが学生・教職員はもとより広く社会に向けて発信されることが求められている趨勢を踏まえて、両誌の相互の位置づけを再考し、さらなる充実を目指すべき時期が来ているかもしれません。（なお、「総合人間学部広報」は、総合人間学部のホームページからも、直接アクセスしてウェブ上で読めるようになりました。）

本学部・研究科の広報活動に関してご意見がございましたら、当委員会までお寄せください。今後の参考にさせていただきます。
(廣野由美子)

人間・環境学研究科 **広報委員会**
総合人間学部